

中学校の知的障害特別支援学級における作業学習に関する一考察[†]

—実践を踏まえた今日的課題の検討—

豊田 昌子*・池本喜代正**

真岡市立真岡中学校*

宇都宮大学教育学部**

中学校知的障害特別支援学級の実態や社会構造の変化を踏まえて、作業学習の意義や内容を再吟味すべき時であると考えられる。そこで、特別支援学級における作業学習のあり方を再検討するために、授業の観察分析や担任へのアンケート、聞き取り調査を通して特別支援学級における作業学習の実態と担任の意識を把握し、検討した。

その結果、担任は、キャリア発達の視点から生徒の主体性を重視した活動や、生徒にわかりやすい手続き・手立てなどを重視していること、そして将来を見通したねらいの下で基礎的な知識・技能・態度の養成を図っていることが明らかになった。一方で、在籍生徒の実態の変化、交流及び共同学習の時間の増加、そして社会環境の変化等を背景として、作業学習の設定や運営が難しくなっていることなどが指摘できる。

キーワード：作業学習、特別支援学級、教育課程、知的障害、キャリア発達

I. 問題と目的

1. 問題の所在

中学校知的障害特別支援学級（以下、特別支援学級）では、特別支援教育の目標である「自立と社会参加」を実現するため、作業学習を教育課程に位置づけ取り組んでいる。特別支援教育となって10年が過ぎた今日、特別支援学級の在籍数も増加し、対象児の変化や社会の様々な変化も大きい。だが、特別支援学級の作業学習に関する研究は、あまり行われていない。キャリア教育の視点から、中等教育段階における知的障害児に対する作業学習の意義や内容等について再検討すべき時であろう。

2. 目的

特別支援学級における作業学習の実践を観察し、

特別支援学級担当教師（以下、担任）へのインタビューなどを行い、作業学習について担任が感じている意義、大切にしていることを明らかにすることにより、特別支援学級の作業学習のあり方について再検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象と方法

宇都宮市内の中学校7校の特別支援学級18学級を対象に、作業学習に関して「調査A：授業参観と聞き取り」および「調査B：意識調査」の2つの方法で調査を行った。

(1) 調査A：授業参観と聞き取り

各中学校の作業学習の授業を参観し、生徒の様子、各担任が講じている手立てなどを検討した。そして授業終了後に作業学習について感じている意義、作業学習において大切にしていることなどの事項について聞き取りを行った。

(2) 調査B：意識調査

担任を対象に質問紙による調査を行った。質問内容は、「作業学習の週日課における位置づけ」「作業種目が生徒の実態に適しているか否か」「作業種目の変更を考えているか」「作業種目を決めるポイン

[†] Masako TOYODA*, Kiyomasa IKEMOTO**: A Study on Learning through Working in Special Classes of Junior High Schools.

Keywords : Learning through Working, Intellectual Disability, Special Class, Career Education

* Moka Junior High School, Moka

** School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: ikemoto@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

トは何か」という作業学習の授業に関するものと、「作業種目」「作業種目における特性」「つきたい力」と作業種目に関するものである。

Ⅲ. 結果

1. 「調査A；授業参観と聞き取り」の結果

(1) 対象の特別支援学級の概要

まず、調査対象とした特別支援学級の生徒数・作業種目そして作業日数・時数等を表1に示す。

表1 各学校の作業種目と時数等

学校と生徒数	作業種目	作業の日数	週合計	作業の継続年数
A中学校 8名	紙工芸	4日	7時間	3年
	農園芸(臨時)			3年
	手芸(臨時)			3年
B中学校 10名	箱折り	3日	5時間	6年～
	農園			4年
C中学校 10名	紙漉作業	2日	2時間	1年
	紙製品作り			1年
D中学校 16名	箱折り	3日	5時間	20年～
	製菓園芸			2年
E中学校 10名	クロスステッチ刺繍	2日	4時間	3年
	刺し子			3年
F中学校 30名	平織りの織物	2日	4時間	3年
	箱折り			30年～
	紙工			6年
G中学校 10名	手芸	2日	4時間	6年
	モザイクアート			3年
	農作業			3年
	紙コサージュ			1年

担任は、いずれも40歳代から50歳代のベテランであり、特別支援教育の経験も豊富な教員である。

(2) 生徒の様子

生徒たちは、担任の指示がなくても、自分から動いており、作業に集中して取り組んでいた。自分の仕事に責任をもっており、作業が好きであることが窺えた。困った時は、自分から担任に伝えることができ、挨拶や返事、身支度などをしっかりと行っていた。生徒たちが一つの目標に向かって、それぞれの役割を分担し、正しい態度で作業学習に取り組む姿が見られた。自分の仕事に誇りをもち、自信をもって作業に取り組む生徒が多く見られた。

(3) 講じている手立て

作業学習の中で、担任たちが講じている手立てのポイントを以下に列挙する。①生徒の能力に応じた作業内容の工程の設定、②目標の明確化、③生徒の興味に基づく題材、④挨拶・返事・身だしなみの重視、⑤作業上のミスの重視、⑥売上金での貯金学習、

⑥手順表の活用、⑦視覚支援の準備、⑧補助具の工夫と準備、⑨数を数えるための工夫、である。

(4) 作業で重視しているポイント

担任たちは、将来の自立や就労に向けて、中学生段階の作業で重視しているポイントとしては、製品としての価値、使えるものを作ること、達成感・充実感を味わわせること、人との関わり方の重視、働くための基礎的な意欲・態度を身に付けることであった。

2. 「調査B；意識調査」の結果

(1) 教育課程における位置づけ

アンケート調査により、特別支援学級の教育課程における作業学習の位置付けを調査した。交流及び共同学習の設定や学年の行事・授業など通常学級の時間割を基本とするため、特別支援学級の時間割を組む上で制約が多く、特別支援学級の希望どおりになることは難しいという意見が多かった。

(2) 作業種目と生徒の実態との適合

現在行っている作業種目と生徒の実態との適合性について「十分適している」「まあまあ適している」「どちらでもない」「あまり適していない」「適していない」の5択で回答を求めたところ、1校が「十分適している」であり、他の6校は「まあまあ適している」であった。

(3) 作業種目の変更と決定

今後の作業種目の変更については、変更を考えている学校は2校であり、残り5校は変更を考えていないとの回答であった。表1のように、作業の継続年数が20年以上のものもあるが、それ以外は6年以下と短く、これらは担任が異動してきてから始めたものである。

担任が作業種目を決める際に特に重要にしているポイントは、担任がやれそうなもの、労働性が高い、生徒の興味・関心が高いという点であった。「担任がやれそうなもの」とは、条件的にやれることが限られていることが考えられ、「労働性が高い」という回答からは、仕事ということを大切にしていることが窺える。その他の回答は「材料費があまりかからず、材料もそろえやすいもの」、「技能の習熟(ステップアップ)が目に見える形でわかりやすいもの」としており、生徒の意欲の継続につながると考えている。また、「喜んで使ってもらえるもの」という回答もあった。

(4) 作業種目の特性と育てたい力

ほとんどの学校が複数の作業種目に取り組んでい

る。作業種目は通年で行われているものが多く、臨時的に農園芸や手芸を取り入れている学校があった。20年、30年以上の箱折りは、業者との関係もあり、伝統的に続いていると考えられるが、担任は生徒の実態を踏まえて作業のあるべき姿・ねらいを再検討しながら新たな作業種の導入を図ってきたことが窺える。

1) 作業種目の特性

各中学校で行われている作業種目における特性を把握するために、①現実度、②販路、③仕事量・活動量、④安全性、⑤地域性、⑥製品の利用価値、⑦材料の継続性、⑧実態に合う段階的な工程という項目を設定し、1（あてはまらない）～5（あてはまる）の5段階尺度で回答を求めた。なお、項目については、特別支援学校学習指導要領解説総則等編の作業学習における「考慮する点」を参考にした。

2) 作業学習において育てたい力

作業学習において育てたい力を、①仕事への意欲、②体力、③巧緻性、④確実性、⑤協調性、⑥観察力、⑦責任感、⑧判断力の8項目について、1（あてはまらない）～5（あてはまる）の5段階尺度で回答してもらった。これらの項目については、作業学習指導の手引（改訂版）の「作業学習の目標」を参考にした。

3 中学校（作業種目）ごとの結果

ここでは、紙面の都合上、A中学校とG中学校の作業種目ごとの結果を示す。作業種目の特性、作業種目において育てたい力について、5段階の結果をレーダーチャートで表した。

A中学校は知的障害特別支援学級のみで、作業学習を週当たり7時間設定している。生徒は8名、教員は2名である。参観した作業はアンデルセン手芸を用いた交流担任へのプレゼント作りであった。作業種目の特性としては、段階的工程があり、継続性もあり、安全性も確保されている。販売をしていないため販路の評価は低く、現実度も低い値になっている。地域との関連もほぼないので、地域性の評価も低い。育てたい力については、体力以外のものについては重要視している（図1-1、1-2）。

G中学校では、知的障害学級、自閉症・情緒障害学級の10名の生徒が合同で作業学習を行っていた。

指導者は3名である。週4時間の作業学習を展開している。コサージュは販売しないが3年生を送る会で3年生に贈るため、利用価値・現実度の評価が

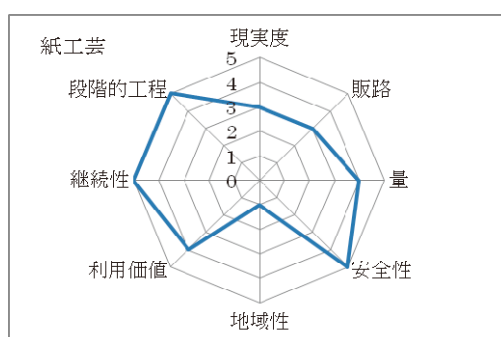


図1-1 作業種目の特性（A中学校）

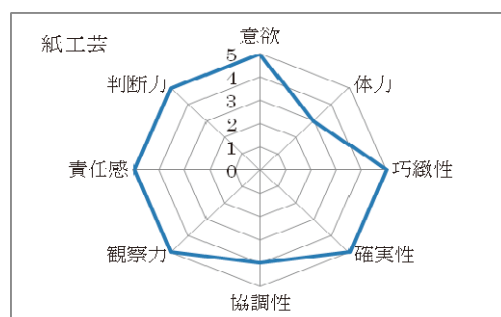


図1-2 作業種目において育てたい力（A中学校）

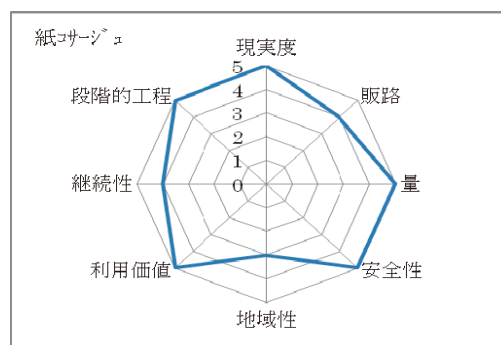


図2-1 作業種目の特性（G中学校）

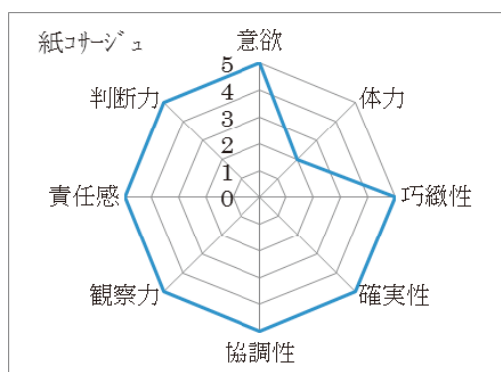


図2-2 作業種目において育てたい力（G中学校）

高い。いくつもの工程に分かれているので、段階的
工程・量も十分に確保されている。作業において育
てたい力は、体力は落ち込むものの、その他につい
てはすべて評価が高い（図2-1、2-2）。

2校の結果のみ掲載したが、他の学校の結果も含
めて言えることは、作業種目の特性としては販路・
地域性の評価が全体的に低いことである。学校祭や
体育祭での製品販売は、多くの学校で実施されてい
るが、学級独自に販売会を実施しているのはD中学
校1校のみであった。担任は、販売をすることによっ
て、作業が本格的になり、働くことが本物になる作
業学習の意義を十分理解している。しかし、学級独
自に販売会を実施するのは容易なことではなく、特
別支援学級を取り巻く環境も大いに影響があり、「で
きればやりたいが、実施するのは難しい」というと
ころが本音であろう。

育てたい力については、ほとんどの作業種目で意
欲、判断力、責任感、観察力、協調性、確実性、巧
緻性の評価が高かった。一方、体力の評価が低い作
業種目が多く見られた。雨天時のことを考慮して屋
内での作業種目が多いことが一番の要因であろう。
農作業を実施している学校もいくつかあるが、体力
を育てることを目指すに十分な規模で展開されてい
るところはほとんど見られない。体を使う十分な活
動量を確保できる作業種目を展開することが難しい
環境もあろうが、キャリア発達の視点から担任が中
学生段階では体力を重視していないと考えられる。

IV. 考察

知的障害教育における作業学習は、主に中学・高
校段階の生徒に適用され、教育課程上、大きなウエ
イトが置かれてきた。だが今日では、キャリア発達
の視点から、発達段階の各段階において将来の「一
人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤と
なる能力や態度を育てる」ことが求められており、
それは単に作業能力をつけて就職をすることを目指
す教育ではないと言える。また、障害児を取り巻く
社会的な変化、保護者の意識の変化、そして卒業後
の進路選択の広がりとともに、中学校特別支援学級
における障害程度が軽度である生徒の割合が増加し
ており、従前の作業学習のあり方への見直しがなさ
れ、本研究からもわかるように多くの特別支援学級
において作業学習の再検討がなされている。

担任が作業学習において重視している点として

は、①生徒自らが主体的に取り組む作業学習、②販
売活動も取り入れた本格的な作業学習、③担任も生
徒と共に働く姿勢、④作業の目的あるいはテーマを
明確化、⑤知識・技能よりも態度面や意欲面の重視、
という5点を指摘できる。

特別支援学級における作業学習の変遷を見ると、
戦後の混乱期からの労働力育成を目的とした特殊学
級での実践から始まり、中学卒業後の就労を目指し
た職業教育を経て、重度の生徒も受け入れながら働
く態度、意欲の重視に転換していった。今日、担任
が大切にしていることは、これまでの作業学習の意
義・ねらいと大きく矛盾するものではないが、生徒
自身の主体性を重視した活動や、生徒自身にわかり
やすい手続き・手立てなどを重視していることや将来
を見通したねらいの下で、即効的ではなく、基礎
的な知識・技能・態度の養成を図っていることが読
み取れる。

今回調査した特別支援学級の担任たちは、経験が
豊富であるが故に、独自に作業種を開拓し、ねらい
を吟味し、作業学習の実践上の工夫を行ってきて授
業を展開している。新たに特別支援学級を担任する
教師が増加しているが、作業学習内容の検討ととも
にキャリア発達という観点からの作業学習の見直し
が強く求められるところである。また、特別支援学
級においては、共同及び交流学习に参加する生徒が
増えており、通常学級主体の教育課程の中で特別支
援学級が自由に作業学習を含む教育課程を設定する
ことが難しくなっていることも指摘できる。こうし
た背景を踏まえ、特別支援学級の作業学習について
は、より実践を重ね、実践の交流を深める中で望ま
しい作業学習の在り方を探求するべきであろう。

V. 主な参考文献

- 1) 小森純代・池本喜代正（2016）中学校知的障害
特別支援学級における作業学習内容の変化―宇都
宮市を中心に―、宇都宮大学教育学部教育実践紀
要、第2号、183-186。
- 2) 檜和田祐介、小田原舞、藤井朋子、西勉、落合
俊郎、若松昭彦（2013）中学校特別支援学級にお
けるカリキュラムの開発―職業生活を視野に入れた
指導内容の検討―、広島大学学部・附属学校共
同研究機構研究紀要、第41号、63-68。

平成29年3月29日 受理